

山本沙姫 表紙イラスト シコルスキー

試し読み版



いもろと サマーデイズ 番外編
秘密の遊園地日記

二次元ぷち文庫

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『いもうとサマーデイズ番外編 秘密の遊園地日記』
に基づいて作成しております。

※本作は二次元ドリーム文庫『いもうとサマーデイズ お兄ちゃんといっしょ』（キルタイムコミュニケーション刊）とともに読みいただけます、より楽しみいただけます。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

The background features a group of anime-style girls. In the center, a girl with short brown hair and large brown eyes looks forward with a slight smile. To her left, a girl with blue hair is partially visible, smiling. To her right, a girl with long purple hair and purple eyes looks down. Further right, a girl with light purple hair and blue eyes is visible. The overall scene is set against a soft, light green background.

いもっとな サマー
デイズ 番外編
秘密の遊園地日記

山本沙姫
表紙／シコロスキー

登場人物紹介

Characters

みどりかわな つみ

緑川奈津美

面倒見がよくしっかり者で、四姉妹をまとめる長女。生徒会に所属している。

こうすけ

緑川浩介

父親の再婚により、四人の義理の妹たちの兄となった少年。魚オタク。

こずえ

緑川 梢

浩介に対して、勝気で反抗的な態度をとる次女。水泳部のエースで、巨乳。

ゆうな

緑川夕菜

おとなしく、あまり感情を表に出さない三女。浩介と同じ生物部の、後輩でもある。

緑川まゆか

チアリーディング部所属の四女。夕菜とは双子だが、対照的に明るく元気な娘。

七年前に母親を亡くして以来、父子二人で観賞魚ショップを営みながら暮らしてきた魚好き少年、みどりかわこうすけ緑川浩介。彼の日常は、ある夏の暑い日を境にガラリと一変した。

父親の源蔵が、げんぞう長年仕事で交流のあったペット関連書籍のライター、きたはらゆきえ北原雪江と再婚。さらに彼女には四人の娘がいた事から、新たな母親と同時に妹もできたのである。その上七人家族になった翌日、両親が仕事に託けた再婚旅行に出てしまい、一週間兄妹だけですごす事になってしまったのだ。

突然の家庭環境の変化に戸惑いながらも立派に店主代理を務め上げ、そして妹たちとの絆を深めていった浩介。しかし五人の結びつきは、兄妹のそれとは少し違う形になってしまったのであった。

そして時は流れて、そろそろ秋の足音が聞こえはじめたとある日曜日の昼下がり。

「ありがとうございます。またお越し下さい」

広い店内に野太い声を響かせて、大柄な中年男性が深々と頭を下げる。

「すいませーん、ネオンテトラ五十匹下さい」

「はいっ、ただいまー」

お客と呼ばれたショートカットの茶髪娘が、瑞々しいスイカのような巨乳を揺らしながら網と桶を手に水槽へ駆け寄って行く。

朝からずつと客足の絶えない観賞魚ショップ、グリーンリバー。自然の水景を再現する水槽作りの名人、緑川源蔵の店という事で休日ともなればはるか遠方からも魚マニアが訪れる。いわばアクアリストの聖地なのだ。

さらに、最近では美人四姉妹が店を手伝う事が評判となり、彼女たち目当てで新たに魚を飼いはじめて常連客になった人も多い。そのため昼食は一家揃ってという訳にはいかず、いつも交代で取っている。今は先に済ませた源蔵と次女の梢しずえが、店を切り盛りしていた。

「ごちそうさま。さて……」

「あつ、後片づけは、わたし……やりますから……」

遅い昼食を終え、食器を運ぼうとした浩介。だが、彼は長いおさげ髪の少女に止められた。小柄で華奢な体つきに青白い肌と、少し潤んだ虚ろな瞳が儂い美しさを感じさせる彼女の名は夕菜ゆうな。緑川四姉妹の三女である。

元々同じ学園の生物部に所属する後輩であった彼女は、はじめのうちはつい癖で兄を先輩と呼ぶ事もあったほどよそよそしかった。しかし今では、積極的に彼の世話をするほど懐いているのである。

「ありがとう、じゃ頼むよ」

洗い物を妹に任せると、浩介は再び座ってお茶を啜る。その傍らで、長い髪をウサギの

耳のように束ねた少女が食い入るようにテレビに見入っていた。末っ子のまゆかである。夕菜とは双子であるが、姉とは対照的なクリクリとよく動く大きな瞳と血色の良い肌を持つ彼女は、チアリーディング部に所属する活発なスポーツ少女だ。そして、初対面の時か
らずつと浩介を「お兄ちゃん」と呼び慕うほど人懐っこい甘えん坊である。

「勝子のーっ、突撃お宅訪問ーっ！」

テレビのスピーカーから響く、甲高い女の声。流れているのは、生放送バラエティー番組の一コーナーであった。毒舌で人気のある巨腹の女性お笑い芸人が、視聴者から寄せられた情報を元に一般家庭を突撃取材するというものである。

「今日は、龍浜町の匿名希望さんから、近所が変わったペットを飼っている人がいるというハガキがきたので、取材に来ましたーっ！」

カメラに向かって、異様にテンションの高いレポーターが視聴者の興味を掻き立てるようにオーバーな身振りを交えながら叫ぶ。動くたびに、剥き出した二の腕がプルプルとコンニャクか何かのように震えた。

「へー、どんなペットかなー。なんだと思う？ 浩介お兄ちゃん……」

「さ、さあ……なに、かなー……」

彼女に引つ張られるようにはしゃぎながら、おきゃんな妹は話しかけてくる。実の所、浩介はレポーターの横暴ぶりが嫌で、この番組はあまり好きではない。しかし可愛い妹が

毎週楽しみにしているのです、いつも付き合っただけで見ていられるのである。

「それでは今日も、レッツ突撃ーっっ！」

やがて巨体を揺らしながら、喧しいお笑い芸人はマイク片手に古びた一軒家にドタドタと入り込む。後に続くカメラが、目的の変わったペットを捉えた。

「あ、見て見て、すごいお魚がいるよー。これなーに？」

画面を差しながら、まゆかは嬉々として兄に問いかける。白く細い指の先では、丸味を帯びたいかつい体型の三十センチほどある大型魚が、澄んだ水の中を悠然と泳いでいた。光を浴びてキラキラと輝く、グレーの地に銀粉を振りまいたような美しい鱗。顔周りやピンと張った鰭に入る淡い黄色が、表面積の広い魚体に絶妙なアクセントとなっている。そして時折鋭い歯を覗かせる大きな口が、自分が自然界で食物連鎖の上位にいる者である事を無言で語っていた。

「ん……ジャイアントイエローピラニアだな。肉食で怖そうに見えるけど……けっこう臆病な魚だよ……」

目の前に現れた南米の肉食魚について、つい熱く語りたくなる心を抑えつつ魚オタク少年は妹の質問に手短かに答える。

「へーそうなんだー。よく見るとなんだか可愛いね……」

兄の説明に耳を傾けながら、好奇心旺盛なツインテール少女は悠然と泳ぎ回る魚を目で

追う。彼女に釣られるように、浩介も身を乗り出して画面をまばたき一つせずに見つめた。

「それにしても見事な個体だな。大切に育てられているんだらうね……」

一メートルほどの水槽には他の魚はおらず、大型魚を飼うには理想的な環境だ。ガラスには苔や汚れがまったくなく、よく手入れが行き届いている。無論、魚自体にもスレ傷や鰭の破れ、それに肉食魚によく見られる鼻先に穴の開く病気にかかった様子もない。

飼育下にあつても野性味を失っていない大型魚の迫力と美しさに、魚オタク少年はすっかり心奪われてしまった。

「見て見て、ホラ。あたしの顔よりでっけーピラニアー！ え？ お前の顔の方がでかいってー!? まーさーかーっ！」

画面に見入る浩介の耳に、爆竹のように五月蠅い声突き刺さる。水槽のガラスに顔を近づけて、マイクが壊れそうなほどの大声で巨漢レポーターが叫んだのだ。

(あんなに騒いだら、魚だつて落ち着けないだろうに……)

臆病な魚を心配する彼の胸の中に、モヤモヤと嫌な感覚が沸き上がる。

「やつ、やめて下さいよお……」

声なき被害者に代わつて、飼い主とおぼしき大柄な青年が蚊の鳴くような声で傍若無人な乱入者に呼びかける。しかし相手は聞く耳持たずガラスにキスしたり、かどを叩いて魚を脅かしたりと、好き勝手にやり放題だ。

パシヤパシヤパシヤツツツツ!

水面を激しく波立たせて、怯えた魚が激しく泳ぎ回る。このままではガラスにぶつかつてケガをするか、あるいは水槽から飛び出してしまいかねない。

パンツッ!

「なっ……何やってんだ! こいつはっ!!!」

両手をテーブルに突き立てて、魚好き少年は勢いよく立ち上がる。いつも温厚な彼だが、臆病者をいじめる無法者にととうとう堪忍袋の緒が切れた。

「ひっ! おっ、お兄ちゃん……!」

短い悲鳴を上げて、握り拳を口元で合わせて肩を竦めるまゆか。

ガッシャーんツツツ!!!

「こっ、浩介……兄さん……!」

夕菜も手を滑らせて、洗っていた皿を落としてしまう。いつも笑顔を絶やさないと、心優しい兄が見せた般若のような顔に、双子の妹たちはただ驚きうろたえるばかりだ。

「まったく、弱い生き物を虐待して見世物にするなんて……許せないっ!」

怯える彼女たちの様子に気づきもせず、浩介はテレビ局に抗議すべく、傍らに置かれた電話を手を取った。

「やめて下さいっ! 妹たちが怯えています」

だが、突如耳に飛び込んできた矢のように鋭い口調の声に、ボタンを押そうとした手がピタリと止まる。振り返ると、背中まで届く長い黒髪の少女が、廊下から茶の間に入ってくるのが見えた。

白いワイシャツと、真つ赤なミニスカートを纏った彼女は身長一七〇センチを越えており、小柄な浩介よりも頭一つ高い。長い前髪の下から覗く広い額と、スツときれいに通った鼻筋。それに、こちらを真剣に見つめてくる黒くつぶらな瞳が、知的で落ち着いた印象を醸し出す。

少しブラのラインが浮き出た胸は、大きすぎず小さすぎず、かろうじて八十センチに達するぐらいのサイズだ。しかしきれいに整った釣鐘型をしており、上向きにツンと尖った小さな乳首が、微かに薄布を持ち上げている。

少し屈んだだけでも中が見えてしまいそうなほど短いスカートから伸びる、白く張りのある長い足と、キュッと引き締まった足首。そして、一步踏み出すたびに左右にプルプルと揺れる少し大きめのヒップ。ただ大きいだけでなく、左右均等に洋梨型の曲線を描いており、実に美しい。

清楚で可憐な外見と芯の強さを併せ持ち、なおかつ大人の色香をほんのりと感じさせる美少女の出現に、荒ぶる魚オタクの胸が高鳴った。

「な、奈津美……」

腰をゆっくりと引き、突き立てた一物を少しづつ引き抜いていくとまるで名残惜しむように湿った肉褌が絡みついてくる。そして、亀頭のエラが抜け出る直前で、再び下腹部を前へ押し出す。大海原を行くクジラのように、ゆったりとしたピストン運動を繰り返して、浩介は妹の産道を解していく。

「はあっはあっ、あっ……はあんっ……おっ、おなかの中……いっぱい、お兄様のが……
 つっ……詰まつてるうーっつっ！」

グシユツグシユツジュツジュツ……。

夜景が見やすくなるため、電灯のついていない薄暗いガラスのゴンドラの中に、淫靡な息づかいと水音が響きわたる。

「あっ、あああんっつっ……」

肉体の奥底を撫で回される、心地よくすぐたさがジワジワと全身に広がり、奈津美は背筋をブルブルと震わせながら喘ぐ。耳の中から男心をくすぐる淫らな声が、思春期少年の劣情心を激しく燃え上がらせた。

「なっ、奈津美いっ！」

いきなりトップギアに入ったかのように、腰の振りが大きく、激しくなった。

グシヤツキシユツグシユツグシユツグシユツグシユツ……。

「ひっ、ひいっ！ おっ、おにい……さまあっ！ こっ、こんなにはげし……はあん

っ!!」

背後でいきなり暴れだした兄に焦りながらも、いつもの優しい彼とは違う、荒々しい逞しさに引き込まれていく奈津美。街中に響き渡りそうなほどの喘ぎ声を張り上げながら、ジットリと汗の浮いた桃尻を男根に引つ張られるようにシェイクする。

ジユツジユブツジユブツ……。

「なっ、なんか……変……とっ、飛んじやいそう……あふうん!!」

「平気……だよ、俺が……支えるから……」

吊るされたゴンドラの中という地にしつかり足の着いていない状況のせいか、まるで世界が回っているような錯覚に囚われる二人。このまま夜空に浮き上がってしまうような、ゾクゾクとした感覚が高所恐怖症娘を襲う。しかし、大好きな兄に抱かれている今は、そんな恐怖すら快感へと変わっていった。

「いっ、いひいっ……もつと、もつとわたしの……ここ、突いて、突いて突いてえんっ!」
クジユツピチュツピチュピチュルツツツ。

振り乱される長い髪の毛の合間から、白いうなじがチラチラと誘うように姿を見せた。少し汗の浮いた柔肌が、微かに注ぐ星明りに輝く姿はなんとも色っぽい。

「……はくうっ」

乙女の柔肌の誘惑に堪えきれず、浩介は水槽のガラスに貼りつくコケ取りナマズのように

に吸いついてしまった。真珠のような歯が、敏感な表皮に軽く触れる。

「ひっ、ひゃはあんっ……そ、そこ、そこお……」

首筋に走るビリッと雷が落ちたような刺激に焦り、細い身体を大きく上下にうねらせて喘ぐ。

「はあっ、はあっ、はああんつつつ……おっ、お兄……さまはあんっ、うっ……しろ……」
その時、荒い息に混じって聞こえてくる、微かな呼び声。しかし呼吸音が邪魔で、何を言っているか聞き取れない。

「なっ、何……なっ……はうっ……」

つい聞き返す浩介の耳に、思わぬ言葉が突き刺さる。

「ふううつつ、後ろ、後ろにも……お尻にも下さひいいんつつつ！」

背中をえび反らせ、はしたない願いを叫ぶと彼女は片手で薄紅色に染まった桃のような臀部を摘まむ。そして、グイッと脇へ大きくずらした。

「あ……」

視線の先で、紅色に輝く菊花が愛しい人の雄蕊の訪れを求めて、ヒクヒクと誘うように痙攣している。その淫靡な姿が、多感な年頃の少年の心を捕らえて離さない。

（奈津美の……お尻に……）

かつて、梢と体験したアナルセックスの感触が脳裏をよぎる。男根を締めつける、直腸

の圧力。敏感な表皮を撫で回す、粘液を帯びた肉の壁の滑り具合と熱さ。そして、大きく開いた亀頭のエラを弾く肉襲。いずれも、ヴァギナの中とは微妙に違った快感で、男心を激しく燃え上がらせてくれたものであった。

稍よりヒップの大きい奈津美なら、より一層気持ちがいいに違いない。魅惑的な少女の肉体のすべてを知りたい思いが、彼を突き動かす。

「ジュルッジュルッジュルッ……チュポソッ！」

粘りのある水音を立てながら、青筋を立てていきり立つ一物が引き抜かれる。そしてもう一つの肉穴に先端をあてがい、両足を踏ん張って腰を突き出した。

「んっ、くうっ！」

「グリユッ、クリユクリユッ……」

だが、乙女の菊門は閉ざされたままでなかなか開かない。はじめての肛門性交に緊張し、身体が強張ってしまっているのだ。

「あんっ、そっ、そんなにじらして……お兄様のイジワルう……」

粘液塗れの肉槍で、キュッと窄まった菊花を小突かれるのがくすぐったく、奈津美ははしたない喘ぎ声を上げてしまう。兄が焦らしていると思っっているのだ。

「はっ、入らないよお……力を抜いて……」

「ああんっ、早く……はやくう……お尻の穴……貫いてえんっ……」

プチュプチュプチュ……。

尻に広がるこそばゆさに、つい悲鳴に似た猫なで声を上げてしまう淫欲の少女には、背後から呼びかける愛しい人の声が聞こえていない。肉の門は一向に開く気配のないままだ。

(……そうだ!)

手をこまねいていた浩介の脳裏に、かつて梢との時にどうして彼女に肛門を開かせた方法が思い出された。少しカサついた手の平を、ジットリと汗ばんだ桃尻娘の尾てい骨の辺りに当てると、円を描くように撫で回しはじめる。なかなか尻穴を開けずに強張っていた姉を手助けした、夕菜の不思議な手業のマネだ。

「あつ……そ、そこ……はふうんつ……」

腰に広がるくすぐったさに緊張が解け、気の抜けたような声を上げる奈津美の閉ざされた菊門が少しずつ開きはじめた。

「んんっ……こっ、これで……」

ズリユツ、ズリユツズリユツズリユツ……。

右手でヒップを掴み、左手で撫で回しながら浩介は一步前へ踏み出す。輪ゴムで縛られるような強い締めつけが、敏感な龟头から根元へ向けて、少しずつ降りてくる。ヴァギナより強い肉壁の締めつけと熱さ、それに粘り気が、興奮してビクビクと震える肉棒に纏わりつきはじめた。

「はあっはあっ……はっ、入った……入ったよ……奈津美……」

息を弾ませながら、浩介は可愛い妹と新たな繋がりを得た感動と快感を、素直に口に出す。「やあんっ、おっ、お尻……広がっちゃうんっ……こっ、こんなに……」

奈津美もまた、大好きなお兄様にもっとも自分ですら見る事のない排泄口見られ、押し広げられる事の恥ずかしさに心が震えた。同時に沸き立つ、肉体の奥底を弄られる快感と共に。

プリユツ、グリュツクリユツクリユツ……。

肛門の皺を伸ばしながら、高熱を纏った肉杭が、可憐な少女の体内に打ち込まれていく。「あああっ、おっ、お兄様の……大きいのが、お尻の……奥に……ひいつ、いつ、いいーつつつつ！」

菊門に走るやけどしそうなほどの熱さと拡張感に、愛する人にもう一つの処女を捧げられた事を実感し、声を震わせて喜ぶ奈津美。より深く繋がろうと、大きな桃尻を軽く左右に振りながら後ろへ向けて突き出す。

グビユツ、ヂユツヂユクツヂユクツ……。

妹の招きに応じるように、ビクビクと脈打つ肉の杭は熱い肉のトンネルを押し広げながら、奥深くまで進んでいく。

「すっ、すごい……すごいよ……奈津美の、お尻の……中……」

血が止まるかと思うほどの強い締めつけと、ゼリーののように柔らかな肉壁で揉まれる心地よさに酔いながら、浩介は無我夢中で腰を突き動かし続ける。

「おにいさまはあ……こっ、こっちも……切ないのお……」

突然背中を弓なりに反らして叫ぶと、奈津美は片手でシャツのボタンを数個外す。そして兄の引き締まった手を掴み、強引にブラのカップの下へ引き込んだ。

「はあっ、なっ、奈津美の……胸……」

カサついた手の平いっぱい、スポンジを握るような柔らかい心地よさが広がる。さらに、指の間に挟まった乳首のコリコリとした触感が気持ちよく、つい握る力を強めてしまう。

「はっ、はああんっっっ！ お兄様のエッチイ……そこ、いいっっっ！」

片乳に走る、抓られるような軽い痛みが心地よく、身をくねらせて悶える奈津美。直腸に啜え込んだ一物が捻られ、充血した男根に射精を促すような刺激の信号を送る。

「くっ、ううーっっ！」

ヌブツヌブツヌブツヌブツ、メリユツ……。

星空の中でくり広げられる愛欲の宴。はじめて結ばれて以来の甘美な時間に、兄妹という繋がりを忘れて、二人は酔いしれる。

「いっ、いひいっっ……もっ……と……お尻も……む、胸も……あっ！ ああーっっつ!!」

だが、奈津美は思わぬ邪魔者がいたのに気付いてしまう。ガラスに映る、二つの小さな赤い瞳。シートの上に置いていたウサギと、目が合ってしまったのだ。無表情な作り物の動物が、なぜかはしたくない姿の自分を笑っているように見えてしまう。

「やだっ……ウサギが、ウサギが見てる…

…見てるう……見ないでえ……」

恥ずかしさのあまり、頬を真っ赤に染め、身を振りながら、彼女はダダをこねる子供のように泣き叫ぶ。だが、同時に小さな見物者は、彼女にある事を気づかせてしまった。

「あっ……こ、これって……」

夜景をバックに、四方のガラスに映る自分の恥ずかしい姿。肌を露にし、兄の巨根を尻穴に突き刺して喜び悶えている様子が、この星空の下でもしかしたら誰かに気づかれていられるかもしれないという事に。

「ああんっ、わっ、わたし……見られちゃうの？ 街の、みんなに……ああんっ！」

はじめて兄と結ばれた夜、妹たちに覗かれていたのに気づいた時のように恥ずかしいという思いがより一層快感を沸き立たせ、大きな桃尻を振り動かしてしまう。

「ああっ、かつ、可愛い……可愛いよ、奈津美……」

男心をくすぐる可愛い泣き声と、捻りの加わった動きで男根を揉む肉壺。二つの相乗効果でますます興奮する浩介は、上下左右、さらには「の」の字を描くように縦横無尽

に腰を振り、乙女の泉をかき回す。

グシュッグシュッグシュッグシュッ……。

飛び散る汗と愛液の甘い匂いが、狭いゴンドラの中に噎せ返りそうなほど充滿していった。

「おつ、おにい……さまはあ……こつち、おつ、お股も……お股も、切ないのお……」

桃色の荒い息を吐きながら、彼女は兄の細いながらも逞しい手を掴み、股間へと引き寄せる。

「なつ……こんなに……」

手の平にモワモワと広がっていく、熱い粘液で湿った陰毛と柔らかい肉の花弁の感触に興奮し、浩介はスリットの中へ軽く指を滑り込ませた。そしてエサに群がる小魚が暴れるように、節くれた指をくねらせて乙女の肉壺の中を弄りはじめてしまう。

チュプツチュプツチャプツチャプツ……。

「あはあつ、そつ、それねそれいいいいのおーっ！ お兄様の指……あそこ、グチュグチュしてえー！」

普段の生真面目さからは想像つかないほど淫らに喘ぎながら、奈津美は股間を手の平に押しつけるように下げながら腰を振る。

「わああ！ しっ、締まるうう……」

腰の動きに釣られるように括約筋に力が入り、突き立てた男根が引き絞られ一瞬果てそうになる浩介。だが咄嗟に、乙女のアナルの感触を少しでも長く味わいたいと、男根の根元に力を込めて射精を封じ、さらに早く腰を振り続ける。しかし、敏感な表皮をパタパタと弾く肉壁がくすぐったくて、一物から吸い取られるように力が抜けてしまう。限界の時間が、刻々と近づいてきた。

「お……俺、もうっ……出る、でるうっ！」

「あつ、ああーんつつつ、わた……わたしもお……イツ、クウーツツツ、イツちやうつ……イツちやうつつつっつ！」

星々の光に照らされながら愛し合い、求め合う二人に、いよいよフィナーレの時が訪れる。グチュツグチュツグチュツグチュツ、チプチュプチュクチュクツツツツ！

共に最後の瞬間まで、湿った秘所同士が擦れあう快感を極限まで搾り出そうと、ゴンドラが揺れそうなほど激しく腰を振る。

「なっ、奈津美……いつ、イクよおっ、なつみいいいいーつつつ！」

「こっ、浩介……おにい、さまはああああーん！ あつ、あつ、ああああーんつつつ!!!」

ドプシューツツツ！ ドクツドクツドクツドクツドクツドクツツツ……。
熱き肉槍の中を電撃のような刺激が走り、愛欲のマグマが迸る。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>